

大学英語テキストに出てくる スピーチアクト表現の適切さの検証

辻 建 一

1. 調査・研究の目的

場面や目的に応じてニュアンスの微妙な差異を理解しながら、様々な英語表現を使い分けることのできる語用論的スキルは、一般には上級者の課題であると考えられている。例えば「提案」の英語表現としてそもそも Let's や How about あたりしか思いつかないような人に、ある状況のもとでその場に相応しい提案の仕方をするように求めても無理なことは、当然であろう。また語彙力がもっと豊富な学習者の場合でも、現実の言語使用の場面で色々な表現に出会い自分でも使用していく過程で、語用論的スキルは上達するものと見なされている。しかし最近の英語教育では、教室の中でも教師からのインプットを上手に行うことで、学習者の語用論的能力を向上させる工夫が色々凝らされてきている。それに応じて大学テキストも、学習者のコミュニケーション能力育成を念頭に置いて、時にはニュアンスの違いも解説しながら様々なスピーチアクト表現を紹介しているものが増えている。そうすると、大学テキストが各スピーチアクト表現を会話スキットに適切なやり方で組み入れているかどうか、重要なポイントとなってくる。それぞれの状況でネイティブスピーカーなら選びそうな表現が適切に入っていれば、語用論的体験の頻度が限られる FEL (English as a foreign language) 環境においても、学習者は場面や話し相手に応じたスピーチアクト表現を、ある程度自然に頭に吸収していくことになるだろう。そこで本論の目的は、大学テキストが会話のスキットを提示するとき、その状況に相応しいやり方でスピーチアクト表現を織り込んでいることに成功しているかどうか、いくつかの角度から検証することにある。

2. データの収集と分析の仕方

調査の対象として、海外旅行をテーマにしたテキスト 5 冊、ビジネスシーンを想定したテキスト 5 冊、そして大学生の日常生活の場を設定したテキスト 5 冊の、計 15 冊を選んだ。そして、15 年以上日本で英語教師を務めているアメリカ人ネイティブスピーカーとイギリス人ネイティブスピーカーの 2 人にデータ収集に協力してもらい、invite, offer, request, suggest の 4 つのスピーチアクト表現を抜き出してもらった。その結果、海外旅行のテキスト 5 冊からは計 384 個のデータ、ビジネスのテキスト 5 冊からは計 423 個のデータ、日常

生活のテキスト5冊からは計349個のデータが、それぞれ収集された。

その内訳はそれぞれ、海外旅行のテキストは invite(13), offer(84), request(236), suggest(51) ビジネスのテキストは invite(45), offer(77), request(227), suggest(74) そして日常生活のテキストは invite(60), offer(58), request(136), suggest(95) という数である。参考までに、3つのタイプのテキストで invite, offer, request, suggest のスピーチアクト表現の割合はどのように違っているのか、表で示してみる。

表1 テキストのテーマによる各スピーチアクト表現の割合

	海外旅行	ビジネス	日常生活
Invite	4%	11%	17%
Offer	22%	18%	16%
Request	61%	54%	39%
Suggest	13%	17%	28%

割合のばらつき方が異なる理由として、例えば海外旅行をテーマにしたテキストで request が一番多いのは、ショッピングやレストランやホテルなどの場面で、サービス業の人たち相手とのやり取りの中で発せられるセリフ (Could you giftwrap it? I'd like to reserve a table. Would you send up a cup of coffee? など) が多いからだと解釈できる。そして日常生活をテーマにしたテキストで suggest や invite の割合が他のタイプのテキストよりもかなり高いことは、友達同士で何かに誘いあったり提案してあげたりという場面が多いからであろう。

2人のネイティブ教師には次に、収集した1,156個の表現のポライトネスのレベルの評価をしてもらった。テキスト中でのポライトネスの使用法の適切さについて調べるためである。a little rude な表現は1、以下、average は2、polite は3、very polite は4、というふうに4段階に分けて番号をふってもらい、それぞれの数を集計した。3つのタイプの教材で、それぞれのポライトネスのレベルの割合がどのように違っているかを確かめるため、3つの表で示してみることにする。

表2 海外旅行のテキストにおけるポライトネスのレベルの割合

低い ← ポライトネスのレベル → 高い

	1	2	3	4
イギリス人	1%	6%	49%	44%
アメリカ人	0%	5%	54%	41%

表3 ビジネスのテキストにおけるポライトネスのレベルの割合

低い ← ポライトネスのレベル → 高い

	1	2	3	4
イギリス人	1%	7%	54%	39%
アメリカ人	1%	12%	55%	32%

表4 日常生活のテキストにおけるポライトネスのレベルの割合

低い ← ポライトネスのレベル → 高い

	1	2	3	4
イギリス人	1%	16%	59%	24%
アメリカ人	1%	19%	57%	23%

表2、3、4中の1~4のそれぞれの割合を見ると、最もポライトネスのレベルが高いのは海外旅行のテキストで、逆に最も低いのは日常生活のテキストであることが分かる。海外旅行先では初対面同士の会話の場面が多く、日常生活のテキストでは友人同士の会話の場面が多いので、この結果は順当であるといえよう。ビジネスのテキストでポライトネスのレベルの高さが海外旅行のテキストの次になっているのは、ビジネスの場では改まった場面が多いとはいえ、気心の知れた同僚同士の会話の場面もかなり出てくることによると思われる。

3. 状況に応じたポライトネスの表現

次に、2人のネイティブ教師にデータを評価してもらった数値をもとに、テキストの中の礼儀正しい言葉遣いを要求される場面で、ポライトネスのレベルの高い表現が使用されているかどうかを、検証してみる。礼儀正しさが求められる状況といっても、色々なバリエーションが予想されるが、ここでは比較が容易になるように、例えば客相手や上司相手の場面などをAとして1つのグループにまとめるなど、立場の上下関係を考慮に入れたシンプルな基準を設け、各テキストで以下に述べるようなやり方でA、B、C、Dとカテゴリー化しながら検証していった。

まず海外旅行のテキストにおいては、よく状況として出てくるサービス業の人が客を相手にしているときのセリフをAとし、そしてその逆の立場、つまり客がサービス業の人相手に向かって言っているセリフをBとした。また道を尋ねたり写真を撮ってもらうことをお願いしたりする状況でのセリフもAとし、その逆の立場でのセリフをBとした。そしてホストファミリーとゲストの関係などのように、立場的にどちらが上とはいえないが礼儀が必要な状況におけるセリフをC、友達同士の会話など同等の関係でかつ親しいもの同士

の間で交わされているセリフをDとした。海外旅行のテキストから収集した384個のデータを、そのようにA、B、C、Dの4種類の状況に分けて、2人のネイティブ教師が判断したポライトネスのレベルの平均点を出してみると、次の表のようになった。

表5 海外旅行のテキストにおける場面に応じたポライトネスのレベルの平均点

	A	B	C	D
イギリス人	3.5	3.3	3.3	2.7
アメリカ人	3.5	3.4	3.1	2.9

イギリス人の判断とアメリカ人の判断で若干ズレが生じているが、英米の差についてはここでは追究しないことにする。まず明らかに目につくのは、一番ポライトネスのレベルの高いのが客相手のA、そして一番低いのが親しいもの同士のDという数値結果であり、つまり状況に応じたポライトネスの表現が使われている傾向が見てとれよう。

次にビジネスのテキストにおいても収集した423個のデータを、やはりA、B、C、Dの4つのカテゴリーに分けて、分析した。海外旅行のテキストのときと同様に、客を相手にしている状況のセリフについてはAとし、そしてその逆の立場のときのセリフをBとしたが、また会社内でよく出てくる状況を踏まえて、部下が上司と話すときのセリフについてはAとし、そしてその逆の立場、つまり上司が部下に対して言っているときのセリフについてはBとした。そして、会社で同僚が集まって打ち合わせしている場面など、上下関係的には同等だが礼儀が必要な状況でのセリフをC、同等の関係で親しいもの同士の間のセリフをDとした。そしてポライトネスのレベルの平均点を出してみた結果、次の表が得られた。

表6 ビジネスのテキストにおける場面に応じたポライトネスのレベルの平均点

	A	B	C	D
イギリス人	3.6	3.0	3.4	3.0
アメリカ人	3.4	3.0	3.2	3.1

AとBの差が大きく開いており、上司が部下にものを言う立場、つまり目下の人相手のセリフのポライトネスのレベルと、その逆の目上の人相手に言うセリフのポライトネスのレベルとの差が、とても大きいことがうかがえる。そしてBとDの間にほとんど差がないことも、海外旅行のテキストとの大きな違いである。

最後に、3つのタイプのテキストの特徴を見比べるために、日常生活のテキストでも上と同様の基準と方法で、収集された349個のデータをA、B、C、Dのカテゴリーに振り

分けてみた。

表7 日常生活のテキストにおける場面に応じたポライトネスのレベルの平均点

	A	B	C	D
イギリス人	3.4	3.0	3.4	2.9
アメリカ人	3.3	3.0	3.3	2.9

表5、表6、表7の3つを全体的に眺めてみると、状況から考えてポライトネスのレベルが高いことが予想されるAとCの値が各表で高くなっており、また一番ポライトネスのレベルが低いであろうことが予想されるDの値が各表で低くなっている。

しかし、各タイプのテキストで数値の傾向に違いが生じていることにも注目したい。例えば海外旅行のテキストの場合、他のタイプのテキストに比べて、AとBのポライトネスのレベルがとても近い。これは、海外旅行先では見知らぬ土地で慣れないことが多いので、サービス業の人相手とはいえどもお願いするような気持ちが交じり、丁寧な言葉づかいを選ぶことが多いからだと理解できる。またビジネスのテキストの場合、同等で親しいもの同士の会話のポライトネスのレベルが、他のタイプのテキストよりも若干高い。ビジネス社会の中での会話なので、同等の立場でも大人同士の節度をもった話し方をする傾向が強いからだと思われる。またビジネスのテキストにおいて目上の人に対するAの値が他のタイプのテキストのAの値よりもやや高めなもの、同じ理由によるだろう。

つまり各タイプのテキストにおける数値の傾向の違いについても、それぞれのテキストのテーマ上の特性を反映しているものと見なすことができ、全般的にいて、大学テキストには状況や相手との関係に応じた適切な丁寧度の表現が織り込まれていることがうかがえる。

4. request の表現について

大学テキストに登場するスピーチアクトの色々な表現は、普段ネイティブスピーカーが使うスピーチアクトの表現と同じような割合で出てくるのだろうか。その点を検証するため、今回収集したスピーチアクトのデータで最も数が多かった request の表現を取り上げて、大学テキストに出てくる表現と実際ネイティブが使う表現との対応関係を、調べてみることにする。その調査の目的のために本論では、ネイティブスピーカーが自然に使う表現の実例として、早稲田大学の鈴木利彦氏が2007年にアメリカのミズーリ州の英語ネイティブスピーカーの大学生150人あまりから、談話完成テストとロールプレイを用いて収集したデータを採用した。そしてそのデータから、request の表現として代表的なものを12通り選び、今回ネイティブ教師に大学テキストから抜き出してもらったデータと対応させてみ

ると、次のようになった。

表8 大学テキストとネイティブの request の各表現の割合の比較

Request の各表現	大学テキスト (372個)		ネイティブ (151個)	
	数	割合	数	割合
Will you ～?	4/372	1%	9/151	6%
Would you ～?	25/372	7%	10/151	7%
Can you(I)(we) ～?	58/372	15%	55/151	36%
Could you(I)(we) ～?	106/372	28%	17/151	11%
May I ～?	42/372	11%	19/151	13%
Would(Do) you mind ～?	12/372	3%	7/151	5%
Would it be(Is it) possible(OK)(alright) ～?	11/372	3%	5/151	3%
Do you think you(I) could(can) ～?	1/372	1%	9/151	6%
I'd(We'd) like(I'd(We'd) you) ～.	77/372	20%	1/151	1%
I need ～.	9/372	3%	11/151	7%
I was wondering if ～.	6/372	2%	3/151	2%
Let me(us) ～.	21/372	6%	5/151	3%

このように並べて見ることにより、大学テキストデータとネイティブデータの顕著な違いがいくつも見つかる。例えば、Can you(I)(We) ～? の割合がネイティブデータでは36%で大学テキストデータは15%、Could you(I)(We) ～? の割合がネイティブデータでは11%で大学テキストデータは28%という数字が出ている。また大学テキストデータでは20%もある I'd(We'd) like ～. I'd (We'd) like you ～. が、ネイティブデータでは1%しか出てきていない。

ここでひとつ留意したいのは、ネイティブデータのほとんどが大学生同士の日常生活における場面を想定していることである。そこでネイティブデータが、大学テキストの中でも日常生活のテキストのデータの割合と近似している事実はないか確かめるため、データを収集した大学テキストを海外旅行、ビジネス、日常生活のそれぞれのタイプに分けて、改めて12通りの request の表現の数を調べてみた。12通りの request の表現の372個中の内訳は、海外旅行のテキストは150個、ビジネスのテキストは123個、日常生活のテキストは99個であったが、比較しやすいように各表現の割合のみを並べて表にしてみた。

表9 大学テキストとネイティブの比較

Request の各表現	海外旅行	ビジネス	日常生活	ネイティブ
Will you ～?	1%	1%	2%	6%
Would you ～?	10%	7%	1%	7%
Can you(I)(we) ～?	11%	12%	27%	36%
Could you(I)(we) ～?	20%	35%	33%	11%
May I ～?	15%	8%	9%	13%
Would(Do) you mind ～?	0%	3%	9%	5%
Would it be(Is it) possible(OK)(alright) ～?	2%	3%	5%	3%
Do you think you(I) could(can) ～?	0%	1%	0%	6%
I'd(We'd) like(I'd(We'd) you) ～.	34%	14%	8%	1%
I need ～.	2%	3%	2%	7%
I was wondering if ～.	1%	3%	1%	2%
Let me(us) ～.	4%	10%	3%	3%

海外旅行のテキストは、I'd(We'd) like ～, I'd (We'd) like you ～. の割合がさらに跳ね上がって、34%にまで達している。これは海外旅行のテキストでは、メニューの注文の場面などの I'd like a cheeseburger, please. といったような定番の表現が頻出するからである。ビジネスのテキストでは Could you(I)(we) ～? の割合が高くなっている。ネイティブデータでもそれらの表現はある程度の割合を占めてはいるが、一般にポライトネスのレベルが高いとされている表現としては、ネイティブデータの場合、May I ～? や Do you think you(I) could(can) ～? が、ビジネスのテキストよりもかなり多くなっている。日常生活のテキストについては、他のタイプのテキストより Can you(I)(We) ～? の割合が高くなっており、ネイティブデータに近づいている。それ以外にも、May I ～? Would(Do) you mind ～? I was wondering if ～. Let me(us) ～. の表現の割合も、日常生活のテキストはネイティブデータと比較的近いことが示されている。

5. 結論と今後の課題

本論の前半では、大学テキストに出てくる表現のポライトネスのレベルの適正さを調査した。その結果、通常丁寧な言葉づかいをすべき状況、つまりサービス業の人たちが客を相手にしたときや、部下が上司と話すときのセリフのポライトネスのレベルの平均値は高かった。その一方で、くだけた表現がよく使われると予想される友達同士の親しい関係での会話などでは、ポライトネスのレベルの平均値はやや低めだった。さらに、客のサービス業の人相手のセリフや上司の部下に対するセリフのポライトネスのレベルの平均値と、

立場的には同等だが礼儀が必要な状況で発せられるセリフのポライトネスのレベルの平均値を見ても、それぞれの状況にほぼふさわしいポライトネスのレベルが使用されている傾向が読み取れた。これらのことから、コミュニケーション能力養成を趣旨とした大学英語テキストは、ポライトネスの点ではおおむね適切なレベルの表現を織り込んでいるということが分かった。

本論の後半部分で調べた request の表現については、大学テキストデータとネイティブデータとの間で各表現の登場頻度にかかなりの差が見受けられた。箇条書きにしてみると、

1. Would you～? と Could you(I)(We) ～? の2つの表現では、ネイティブデータでは割合がさほど変わらないのに、大学テキストでは極端に Could you(I)(We) ～? の割合の方が高くなっている。
2. ネイティブデータである程度出てくる Do you think you(I) could(can) ～? や I need ～. が、大学テキストでは非常に少ない。
3. ネイティブデータに比べて大学テキストでは I'd(We'd) like(I'd(We'd) you) ～. が非常に多く使われている。

などである。大学テキストが作成される際、実際にネイティブスピーカーが使用する表現の頻度についてもっと意識的になる必要があるかもしれない。しかしその一方で、ネイティブデータと状況設定において最も似ている日常生活のテキストでは、表現の割合が他のタイプのテキストよりもネイティブデータに近い数値が表れているので、日常生活のテキストにおいては実際のネイティブの request 表現の使い方を、かなり反映しているという評価もできる。

本論では、サービス業とその客とか目上と目下といった具合に、あえて基準を単純化してポライトネスのレベルの適正さを調査した。しかしポライトネスの問題は、実際にはもっと複雑である。例えば request の場合、上下関係や親疎関係だけでなく依頼の負担の度合いなども考慮に入れる必要がある。上司が部下に対するときでも、かなり負担の重いお願いをするときは、ある程度丁寧な言葉づかいを選ぶだろう。他には文化社会的要因も考慮する必要がある。例えば、欧米人の場合初対面の人に対しても、相手に親しみの気持ちを表すためにあまりポライトネスの高くないセリフを使うかもしれない。さらに、客相手のサービス業といっても、レストラン、ホテル、観光案内、郵便局、タクシーなどでは、それぞれの職業の特性に応じて表現の傾向に違いがあると思われるし、またビジネスの場合とでは、やはり使う表現に違いが出るのが当然である。今後はさらに項目を細分化してデータを分析し、状況に応じたスピーチアクト表現が、適切に大学テキストに織り込まれているかどうかを、細かく調査・検証していく必要がある。

最後にもう一つ見逃せないポイントは、アメリカ人とイギリス人のネイティブ教師それぞれに評価してもらった結果、2人の間でポライトネスの判断に多少差が出たことである。もちろん2人だけのジャッジを根拠に、その差を英米の一般的な差と結論付けるのは早計

すぎるので、今回の調査にはテーマとして含めなかったが、もっと多くのネイティブ教師に評価してもらうことにより、ポライトネスの判断における英米の違いを探ることも今後の課題となるであろう。

(参考文献)

- 東照二 (1994) 『丁寧な英語・失礼な英語：英語のポライトネス・ストラテジー』 研究社
- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育 —データとしてのテキスト』 大修館書店
- 近藤佐智子 (2009) 「中間言語語用論と英語教育」 『上智短期大学紀要』 第29号 73-89
- 水野康一 (2001) 「日本人英語学習者による語用論的能力の発達について」 『香川大学経済論叢』 第74巻第2号 127-146
- 岡田もえ子 (2010) 「語用論的視野に立つ英語教育 —主にポライトネスとビジネス英語を中心に」 『専修大学外国語教育論集』 第38号 13-28
- 大澤真也 (2006) 「英語教育における語用論的能力の概念」 『広島修大論集—人文編—』 第46巻 第2号 19-31
- 斉藤俊雄・赤野一郎・中村純作 (編) (2005). 『英語コーパス言語学 —基礎と実践』 (改訂新版) 研究社
- 清水崇文 (2009). 『中間言語語用論概論 —第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』 スリーエーネットワーク
- Suzuki, T (2007). *A Pragmatic Approach to the Generation and Gender Gap in Japanese Politeness Strategies*. Hituzi Syobo Publishing.
- Suzuki, T. (2009). *A Study of Lexicogrammatical and Discourse Strategies for 'Suggestion' with the Use of the English Speech Act Corpus*. The Cultural Review 34. Faculty of Commerce, Waseda University.
- Suzuki, T (2009). *How do American University Students "Invite" others?: A Corpus-based Study of Linguistic Strategies for the Speech Act of "Invitations"*. The Cultural Review 34. Faculty of Commerce, Waseda University.
- Thomas, Jenny. (1995). *Meaning in Interaction*. London: Longman.
- 辻建一 (2012) 「大学教材に出てくる「提案」「依頼」のスピーチアクト表現の、コーパスに基づいた分析」 『星稜論苑』 第40号 25-35